[illegible]誹諧七部集　[illegible]

(新)　808-4

俳諧資料カード

年代	文化5年
編者(筆者)	
書名	俳諧七部集
備考	俳書の栞により 文化5年再刻本 (安永3年刊)

(下垣内蔵)

本富藏書
戸廻内氏

さいつ日ころのくはかりなる風よ子園さしのうらかたり
あふけしなる聞へけるハへきるすゆりてあふらかたく
ありしてちひきれかんはみよりいさ祝られあん
なせ紙を書れ厚く世ふかて佳くさる家の河のふく
みしく此ん紙歌へる人の枕草紙をしすくれとの
ふかりこのされくさえあれハたちやらく伊よりて
さとかめ衣とかく評ん冊子と称して風ふりておき
雲ふ流る乃中さらし染んとれそのうしさいさてる
なりしめふ志やしふひてんやとりふそのれ紙魚なふ
虫乃すし世みりてふるおりこぬしくそくもいすると
なくいかんの衣ふのそくるはひとれ志てきのひしくえふよる

の篇紙さくへられまへされたるみなりよこと今らん
事いそくらり先園をくるおまの子しもあくさめるなと
ひとさすしにいふ乃さて京いおとなくらか井く
楊土やれて希閑つんむりし蕭狗の五經紙
なくのかしらよ書てしるふらしの筆よ縄ありいまる子周
か七郎を接つる乃いうしふさふれしてはよふ縁よせん
しれ七郎を諧稽の七經ともいうんなる唐倭なの
さらんかそくらし又しもそんせ同しつるへしそんやく
梅本よらりなくあろし風月ねそんとたちんみよくふ

聱若水母散人呉竹のよ河辺にしるす
天明(?)

春の日

曙見んと人〱の戸扣あひて熱田のかたにゆきしに
渡し舟さわがしくなりゆくほど並松のかたも見えわたりて
いとのどかなり重五が枝折をかりて竹墻かしこにかる
まちあかりのさとのけしきを折ふし出待る

二月十八日

春めくや人さまざまの伊勢まいり　荷兮
桜ちる中馬ながく連　重五
山かすむ月一時に館立て　雨桐
鐙ながらしれぬ家ある家を　李風
志わ風なまぐさく浜の鷗なく　昌圭
くるりと沖の岩まよりつれて　桃里
ウ
須广寺に汗の帷子脱て葬　重五
をかしなまめく笛を式く　荷兮
文王のはやしにけふも出かりて　李風
雨の宿れる角のたかうな草　雨桐
肌さむし一度は骨をほどく世に　荷兮
傾城乳をかくす晨明　昌圭
霧はらふ鏡に人の影移て　雨桐
わやくといふて神輿かく里　重五
ある居よりまゝ真の松なく　昌圭
花に男(ヲトナ)の乗(タヽコ)鳥あくるかは　李風
柳より伝ひてさくら路鶯なるや　重五

入らぬ日より蝶いそぐなり　荷兮
二 こ川ちかし表から家に連とく　李風
うれ懐より梓きく分れ　雨柏
見髪をたぐりたる不切腹し　荷兮
いとおかしこき五位の弁立　昌圭
松乃木よこゑ國の門たち川よまて　雨柏
をもしいは紅もそそめ附るぞ　重五
鉢朗豆腐を篤にもまゐける　昌圭
念仏さぬきれ秋のそれ也　李風
穂蓼生ふ荘を従来に流れて　重五
家名を楢乃名によぶ月　荷兮
傘乃内や背にさす雨の昏に　李風

鉢総おろく出家ありく　雨柏
ウ わりしぎ城酒付たのむ安よそん　荷兮
弱雛ひとつ川を二人して わきを　昌圭
世にあはれぬ唐洗に身をうって　雨桐
弘念にさらしに嫁乃首畑　重五
いくまを花に行くまいをうしく　昌圭
朝も見も高とりによく　李風

三月六日於水亭ふく

茶見坂や畑の川山の八ツさくら　旦藁
おりしうつまむらく乃運　野水
花の梳あら然おろく精えて　荷兮

口きくへよ清うなりけく　越人
松風よたゝれぬ鶴乃濡れ翅　羽笠
萱のうらしき鳴虫をち流月　執筆
ウ
笠白きを秦寺によりり　野水
菊あるに娘ふよんろみへさをく　且藁
表町出るりうく二人髪剃ん　越人
咲いかし車ゆくをとし　荷兮
鮒真つく大津の浜に余りり　且藁
何か上しゆん家の客乃夢　越人
旅衣あらはそうを故せりて　羽笠
花ふそたちん一日のそうゝ　杜国
里人に薄を絶を植乃為　越人

二
月たらき浪に重石をく櫓　羽笠
古乃やうは本乃根よ花の鮎さん　杜国
洞をとは春の温泉山山　且藁
のとりしや錦紫乃後陪岩れ常　越人
内侍のえりしぬ代られ眉乃図　荷兮
物おりふ單ぬけ八将りきふ　羽笠
名もかち栗としちてや上ケ　野水
大年を念仏にさ恵に畝次棚　且藁
ふえ古てを無みまよる隠や　越人
蛇名の草乃あま梢把くく　荷兮
去さる十日をやき妻の粉　羽笠
一枚の寂容を馬りふ寺ふれや　杜国

こゑ槐まつるさんゝさの月　旦藁

陽炎乃ゆくのちからまま婦きて　越人

まつ角神りは寿ゆるしく　荷兮

ウ

田をかへしたる里に出る　羽笠

力乃弟をはなし中乃子　杜国

廿十三

連や三井の寺まゐれ給ひりに　旦藁

るひく乃しぜ竜の山く　越人

見つきくり六九日乃月さなき　荷兮

見乃ほとゝあ牙ゆふみゝ　羽笠

三月十六日旦藁か田家にとまりて

蛙乃ゝきゝてゆゝしき寝覚哉　野水

顔にあつる花の雨こゝり　旦藁

巌高き岩木乃奥な宿りて　越人

まつしく人とこゝる鳥乃子　荷兮

立て乃る渡しの舟乃月影に　冬文

芦の穂ちる傘の端　聴雪

ウ

篠ぎりに施餓鬼の僧の集りて　旦藁

岩のあひより落つる里　野水

雨乃日も瓶焼すゝむ煙より　荷兮

ひとなきゝるも絹の一はな　越人

弱よしは坊主八代まん後捨て　野水

解てんやをかし桜もよけれ　冬文

今宵は更わたりてやとゝね

旧十九日荷兮室にて

咲わけの菊にはをしき白露ぞ　越人
秋の和名にかゝりし順　旦藁
初一ノの夢にこゝろか火を打ぬ　冬文
別の月になりてありし跡　荷兮
縫ぞ花は宮より唐輪まで　旦藁
春ゆく道の笠もつゞらし　野水

二

永き日や鞍をかけるに高るらん　荷兮
貧乃子等生する臣の中　越人
紹鴎が瓢はありて米はなく　野水
連歌のもとにあらし風ぞ吹　冬文
流去年乃柴押よせて薪とせん　越人

岩苔とりの篭にさげつゝ　旦藁
むさぼりに夜さへ寝ぬ世の中に　冬文
筵二枚もひろき我庵　越人
朝毎の露あはれさに麦作ル　旦藁
寒さうちをば送りまゐらしの月　野水
風のなきは秋の日舟に網入よ　荷兮
鳥羽の湊のおどり笑ひに　冬文
あらましはさこね緒をありて退ぬ　野水
隠しくし一軒筆のゆゐなりし　荷兮
家毎乃あまりの限に日記して　越人
禄を皆ゆるいとしのかこの代　旦藁
山も花衣のこゝろ松の日に　冬文

早うしてしるど雪雀 明なり　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭　越人

山吹乃あふれさ泥のくもれ尓

蛙ゑめくふ廿日く岩くし　舟泉

きりんなや餘晒さへき雪ありて　聴雪

行幸乃ふみ尓流ふ土器　鑫爵

翎日を高りり鍛冶のいそかしく　荷兮

月たくさ寒乃門をやくあき　執筆

春

昌陵乃松もえ尽ぬ御代の春　利重

元日の末ぬるの競馬見ゆし　重五

初去乃遠里牛ぬかり日尓　昌圭

ゆきの去海をかくあり麦ぬ尓　雨桐

門き松芍薬園の雪さむく　舟泉

鯉の音水尓乃閣く梅白し　羽笠

舟く乃小松ふ雪ぬ挿ゆり　且藁

曙乃人数牡丹家よひきゆり　杜国

纏てし次元日里乃聴りこれ　犀夕

星ゆくしくかとまぬ先ぬ写乃色　呑霞

ゆふくても小松負ひるん牛乃菱　馳雪

朝日二分柳の動く白ひふれ　荷兮

先はく老乃宋ひくき雲尓　同

芹摘しくてこけく濡たくさ鶏りぬ　且藁

のりまする人乃行くかしとて　越人

みかへるも白きやしくれとゞ

古池や蛙飛こむ水乃おと　芭蕉

傘張乃睡り胡蝶のやどりかな　重五

山や花墻根くの酒ばやし　亀洞

花にうづもれて夢より直に死ん哉　越人

春野吟

足跡に桜を曲る庵二ツ　杜国

麓寺かくれぬものはさくらかな　李風

枝まてて桜乃遅きあるかな　荷兮

餞別

藤の花たゞうつぶいて別かな　越人

山畑乃茶つみぞかざす夕日かな　重五

蚊ひとり川に寐る夜半の月　旦

夏

かくれ家も乃山ゑの尾の虫　九白

郭公さゆのみ焼てねる夜かな　李風

かつこ鳥板屋乃背戸の一里塚　越人

うれしさに葉がくれ梅の一ツかな　杜国

若竹のうらふみたるゝ雀かな　亀洞

傘をさゝまて蛍こ欲かな　舟泉

武蔵坊をとふらふ

まとかきや志てゆく雲乃衣川　高露

逢坂乃夜ハ笙こゑ所にゆく

るうへこすおくれたりの夜の月　睡雪

老聃曰知足之足常足

夕ぐれに雑炊あつき菜屋かな　越人

篇木乃微雨こぼれて鳴戮かな　栩雨

はしきみハながむる井小寄りけり　塵交

萱草ハ信ぶ黒き花乃色　荷兮

蓮池のふかさわすれて浮葉かな　仝

暁乃夜陰葉屋れ遅きり〓　昌圭

夏川乃青き石のあまた能哉　童五

譬喩品ノ三界無安猶如火宅

とゞめ家小を

六月乃汗ぬぐひ居る臺ハつれ　越人

秋

着ぬれ畑たまたま黄ばみてきりぐれ　且藁

貧家の玉祭

玉祭柱にしむる夕ぐれ　越人

何きさくまる二孫入れる衣かな　雨相

雲をりをり人をやすむる月見かな　芭蕉

山寺に米つくほどの月夜かな　越人

見かく家も面白や秋の月　野水

八嶋をかきる屏風の絵をみて

具足着て顔乃ミ多し月見舟　仝

侍恋

こぬ殿を待る秦ちし月夜かさん　荷兮

閑居増恋

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな　荷兮

鴛鳥もさらに一人になかりけり　舟泉

冬

るもちぬ重牛八文日の村しぐれ　杜国

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申し　大垣住 如行

宮ぬ尓薬の子乃着りけれ　昌碧

一るをさくかづらむ家の宿のあかり　芭蕉

り焼の煤けをこぼす宿のくれ　越人

芭蕉翁をおくりてかへる時

このはし物ひとしほ名残かな　杜国

隠士にかりなる室をもうけて

あさましき桑袋ひとつ川冬の庵　荷兮

冬の日

笠は長途の雨にほころび帋衣はとまり〳〵のあらしにもめたり侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼえける昔狂哥の才士此国にたどりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとばしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国
日のちり〳〵に野に米を刈　正平
わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすご〳〵となく　荷兮
影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家　杜国
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧に舟引人はちんばか　野水
たそかれを横にながむる月ほそし　杜国
となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衛の花のさかりきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顔おぼろなる　重五

いまぞ恨の矢をはなつ声　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜国
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しらしらと砕けしは人の骨か何　杜国
烏賊はゑびすの国のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけし郭公　野水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　杜国
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜國
廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども壮年
いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水
霜にまだ見る蕣乃食　杜国
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮

麻呂が月袖に鞨鼓をならしけん　重五

桃花をたをる貞徳の富　正平

雨こゆる浅香の田螺ほりうへて　杜国

奥のきさらぎを只なきになく　野水

床ふけて語ればいとこなる男　荷兮

縁さまたげの恨みのこりし　羽笠

口おしと瘤をちぎる力なき　野水

明日はかきにくび送りせん　重五

小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉

月をそかれ牡丹ぬす人　杜国

縄あみのかゞりはやぶれ壁落て　重五

うりしくらき[illegible]町　荷兮

初あれの[illegible]たり嫁乃ハこの[illegible]しく　杜国

うぶ湯[illegible]それぞこの中ゆきさ　野水

糯を[illegible]餅をゆる[illegible]のこなる　[illegible]

うつひさを起そ[illegible]鍋と作りて　芭蕉

篠ふかく梢を[illegible]さむし　野水

三絃からん不破のせき人　重五

道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉

祢さ[illegible]しのさくて七十　杜国

奉加めは法[illegible]重[illegible]　重五

ひとりの傘の下挙(コツ)りさし　荷兮

蓮池に鷺の子遊ぶ夕[illegible]　杜国

[illegible]つかの[illegible]橘をとゞく[illegible]　野水

月にたてる唐輪の髪の赤枯て　荷兮
恋せぬきぬた臨済をまつ　羽笠
秋蟬の虚に声きくしづかさは　野水
藤の実つたふ雫ほつちり　羽笠
袂より硯をひらき山をみる　芭蕉
[illegible]よりて典侍の局の内侍の　杜國
三ケ月なる鸚鵡龍尾がこの式なるいくさ　重五
しらゝ雲はいさむ鉄の猫活剤　荷兮

つゑをひく事僅に十歩
つゝみかねて月とり落す霽かな　杜國
こほりふみ行水のいなづま　重五
歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平
らうたげに物よむ娘かしづきて　重五
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜國
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜國
紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五

まかきまて津浪の水にくつれ行　荷兮
佛喰たる魚解（ホド）きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰かれて　重五
五形（ゲンゲ）菫の畠六反　杜国
うれしけに囀る雲雀ちよふしと　芭蕉
真昼の馬のねふたかほ也　羽笠
褌のさきや矢剣の橋のおそうなき　杜国
庵屋深中川をよみて送りぬ　荷兮
挟し子も宗剃長（タケ）よのひつたん　野水
晦日（ミソカ）をさむく刀賣る年　重五
雪の狂呉の國の笠めつらしき　荷兮
襟に高雄か片袖をとく　芭蕉

あた人と樽を棺に呑ほさん　重五
芥子のひとへに名をこほす禅　杜国
三ヶ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　羽笠
烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜国
聲よき念佛藪をへたつる　荷兮
かけうすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつも夜るの帯引　重五
こかれ飛たましゐ花のかけに入　荷兮
その望の日を我もおなしく　芭蕉
なに波津にあし火焼家はすゝけれと

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花蕀馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
賀茂川や胡麻千代祭り徽ならん　荷兮
いはくらの聟なつかしのころ　重五
おりふしは布搗哥にわすられて　野水
うき世をもちらち挟越る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火おかぬ火燵なき人を見ん　芭蕉
門守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず款冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかうどそむる七夕の流ま　杜国
西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに卜木うつ音　芭蕉

縫の宿り賢なる女みやこの宮　重五
釣瓶に粟をあらふ日のくれ　荷兮
はやり来て撫子かざる正月に　杜国
つゞみ手向る弁慶の宮　野水
寅乃日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地(ツチ)　羽笠
いがきして誰ともしらぬ人の像　野水
泥にこゝろのきよき芹の根　重五
粥すゝる孫あかつきの花まつりしぞ　やまもと
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなく〳〵簾押やりて　羽笠
ねられぬ夢を責るむら雨　杜国

田家眺望

霜月や鸛(カウ)の彳々(ツヽ)ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜国
音もなき具足に月のうす〳〵と　羽笠
酌とる童(ハツハ)蘭切りにいで　野水
秋のころ旅の連歌をいとなみて　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜国
茶に糸遊をそむる風の香　重五

雉追に烏帽子の女五三十　野水
庭に木曾作るこゝろの薄衣　羽笠
あけふらき山橋よりくらん　荷兮
麻かりといふ歌の集あむ　芭蕉
江をとをく猫来居し世を捨て　重五
家月出に身をおもかる　杜国
きらぬ笛にそほろを掃　羽笠
篭輿ゆるす木瓜の山あい　野水
骨をとるへて坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
乞食の簑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾をひく鯉を拾ひ得て　杜国
御幸に進むるみつぎもの　重五

こしふてる年ぬに角豆の花かれし　野水
萱やまばらに炭團はく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみのたてる蓮の実　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
露をくきらに風せこのめしき　杜国
鉛積て屋根かれける行鹿　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　正平
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜国
春のしらをれ雪こゝさくとよふ　重五

水干を秀句の聖わかのやうす　越人

山茶花白く笑れしかりし　ぞう

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠

樽火にあふるゝこれもらの松　荷兮

すゝき萠下きに碇とちやさして　重五

擔笠に京越座の名を鉤寄　杜国

狼り蛤かゝる月をもる海　芭蕉

ひとゝは樽をたゝみし波草山　埜水

ひさご

江南乃珍碩我ふひさごを送るこれハ是水漿を
もり酒をたしなむ器にもあらず或ハ大樽に造りて
江湖をわたれといへるふくべにも異なり吾また後の
恵子にして用る事をしらずつらつらそのほとり
に睡りてあやまりて此うちに陥る醒て見るに日月
陽秋きらきらとして雪のあけぼの闇の郭公も
かけたることなくなを吾知人ども見えし皆
風雅の藻思をいへりしらず是ハいづれの所
にして乾坤の外なることを出てそのことを云て毎日
醉肉になるより入

元禄三六月

越智
越人

花見

木のもとに汁も膾も桜かな　翁
西日のどかによき天気なり　珍碩
旅人の虱かき行春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘　翁
月待て仮の内裏の司召　碩
籾臼つくる杣がはやわざ　水
鞍置る三歳駒に秋の来て　翁
名はさまざまに降替る雨　碩
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水
中にもせいの高き山伏　翁

いふ事を暁一方え落しけり　碩
本なき節よ定家法乃り川　水
物哉ふ身をその噂せつ哉　翁
月見る顔乃細松を夜露　碩
秋風の糸をこえうる波の音　水
房ゆくつきや白子の松　翁
千部読花乃盛の一身田　碩
巡礼死ぬるたのこをるよ　水
何よりも誹の跡をおそれ哉　翁
文書かしの力さくなき　碩
羅不首をいひて流れから　水
然思みちれと海のさひけり　翁

手束弓紀れ哭きすゝ磧よ　碩
酒でうけたる秋あふ燗鍋　水
此六乃圓をのそくまで番町で　翁
假れ枯佛よむりよ念仏　碩
かりしよ土同ふ飛まハ發心　水
家名古里のならふまそもの也　翁
勝れてりしぬ躍乃猫を葉　碩
月秋しふ明渡る月　水
花落あまりやまけんそう枯て　翁
唯四方切る草菴の露　碩
一貫れ錢むつうしと盗みけり　水
醫者乃忍まらふハ微妙分實　翁

花咲て芳野あらしを見廻　水

虻ありさくろし土の山中　碩

翁十二　珎碩十二　曲水十二

いろくの名をむつかしや春の草　珎碩

うかれて猫の妻ちさぬる　翁

蝙蝠ののきのふつくとさし出て　路通

かる籠乃そくをしらぬ酢瓶より　仝

紫蘇の実をつむさせ入る茶釜　碩

親子ならしひて月を抱く　仝

秋の色宮も乃ぞき廻すなり　通

こもをたゝみてくばる手まくら併　仝

うつり香乃羽織を首にひきまきて　碩

小六うたひし市の中ゝる　仝

鯱鉾乃ちいさく見ゆる川の端　通

念仏申ておかむこのつき　仝

こしらへし薬うれぬを年の暮　碩

庄世の里乃犬に打とされ　仝

旅姿稚き人乃嗜れて　通

花のあとの月は猶ゝ秋　仝

志かのきさと椽の下を日和なり　碩

生鯛あかる浦荒まろ介　仝

此村の廣さハ鬱着ぬ音つゞかり　荷兮

楽をそんがけてこのきつりといふ　越人

かゝらさる去を退屈もせぬよ色　分

すゞしく渡わしと酒の行るをハ　人

なきのかやる秋乃夕を光ちくひろき　分

蕎麦をうくゞり山の胴中　人

うせんくり里乃もつれ月の数　分

まとりしをつ子のこゝろ裸針し　人

気つしやすぬ亭之しえゝ手　分

文珠の智恵も槃特の愚痴　人

わすれか減丈ゝハお茶なし吟味　分

何ともをちぬ落る蛸　人

志の[illegible]秋の[illegible]て笑　分

[illegible]顔をみせ[illegible]して　仝

汗の香をかくして衣をさり[illegible]し　人

あさ[illegible]ありてふる　仝

花さくり又百人書膳立よ　分

まつハ旅とも打をそさる旅　仝

珎碩九　翁一　路通八

荷兮十　越人八

城下

鉄炮乃音京暑る卯月外　梅径

砂の小麦乃瘦てそろく　里東

西風よ中てお[illegible]の小貝拾かせて　泥土

なのめある一川[illegible]　乙州

碁いさかひ二人ともにつゝ乃るみゝ脇は　恕誰
秋の蚕番れ袖をとう来たる　珎碩
女房花の細うなれ枕をそれて　筆
月の中柱をくるみ坐かちなる　野径
冬の文川原啼しとよく覚えて　里東
就乃杉のしき生つきや　泥土
馬よ百那まで居をとゞめとく　乙州
一里こなたの山乃下荊　恕誰
見舞てまて岩屋よ足乱を　泥土
散られ世ハ洞ふるしくれなと　里東
雪舟よ菜耕の笠女あそこうに　野径
春のにつまく丁百の撥　乙州

月花に庄屋をよつて高ぶらせ　珎碩
艾先乃塩ものかしき早蕨　恕誰
く鞍まへ斜ても斧ぬきられは　里東
半気に通れ　憐まで法　わたす　珎碩
乃みに取り居酒の荒の一[illegible]　乙州
古きをくらきんのする鎌倉　野径
時しらぬ百姓までも烏帽子きて　恕誰
配所を見廻ふ供御の蛤　泥土
ゐもとかゝ息ハ紅遊女の泣やらん　珎碩
連も力も皆居ちなり　里東
かしこ風の大工寺縄に吹返し　野径
奥乃こなるに用叶へさる　乙州

綱剛き秋風ふちいさゝ征矢哉て　泥土
夕也の月ふ蕎麦食樂おもを　惣誰
看経乃嗽(セキ)よゆるさて咲気静　里東
四十まで老煮りつゝしき際　珎碩
髪くせふ櫛乃錦を磨きて　乙刕
拵を細縄ふあみて吹かく　野径
杉村の花ハいおそまるまつき　惣誰
田ふ作偶よ苗乃とりはし　泥土

野径　六　　里東　六　　泥土　六
乙刕　六　　惣誰　六　　珎碩　五
筆　一

雑

亀の甲京へ置て時鳥鳴せん　乙刕
惟牛糞ふ風乃ふくまる　珎碩
百姓乃本郷住までそれのまて　里東
小斎おゝる伊る切ろ乃の縄　探志
猫くゞく奥の間ひろ化猫の身　昌房
蜘蛛岸くさゆる切蛇　正秀
秋萩の露まちこの花坊の庵　及肩
風呂入加減乃まづへの幾なり　野径
賞乃氣のさ古歌ゑ鳴かし　二嘯
雲の中ゝあるかせまこの塵　乙刕
初花ふ雛の窓楊枝おもく　珎碩

んのそこらに寝てあるもゐる　里東
清水藤乃番に吹そこなひし笛の夜　採志
麻かられ起て出八番帰　昌房
我入の中道わかく月よ明り　正秀
すゝき上京をつくゆるやさむ　及肩
蕎麦に盛つる香湖の町座敷の年来　野径
雀を荷ふ笹竜乃ちく鋭き　二嘯
うそを果るはなきみやこに家新して　乙州
陣のはなし幽前の如くぬる　珎碩
塩くくうき出帰路の稼すゝむ　里東
撰ゆかされく家とさあり不の　採志
暗かなきに業猪乃下さそ中し対　昌房

借るを呼る流まわり口　正秀
いさらさる経一節に桜花　及肩
手汲かゆる鯉棚乃秋　野径
乃八くし切薪の紙まよ風吹て　二嘯
なかゝ乃席にもぶの〻激月　乙州
暗飛ふ味のつく了せ騒し乃　珎碩
燥掃うちハ炊よ飯錆る　里東
関をめくる秀れのうそれとるきあろそ　採志
ちわれみおかしさられ上侍　昌房
手ろしうふく絨緞いて織ればけ　正秀
縄を集る寺出ん上蒸　及肩
花乃は置の月待ふ…こしえみて　野径

さくらに狗ふ獅子のまひ風　一晶

乙州 四　孫碩 仝　里東 田

猿志 仝　昌房 仝　正秀 仝

及肩 仝　野径 仝　二嘯 仝

田野

畦道や苗代時乃角大師　正秀

明ぼのゝ雲も出る嵐の靄　孫乙

筋ふとのかやをかけ鳴しまぬ雪　仝

かゆの名残りしき門口の文字　秀

月影に利休乃像を鼻ま鉄　仝

秋しく芋をとる　ろそろしなり　碩

虫喰を畳て捨しと鳴やらむ　秀

行児しの本腹さらぬる　碩

饗文を百も書て若ぎ給ふ　秀

かゝるときより侍乃待　碩

須ニハすさ渦ふ月田わる新紫　秀

狐の出る弓かゝるにやる　碩

月おる御堂七分の銀河　秀

むり能ふ飛るる猪も進まれ　乙

けしぬしって大脇指も守られて　秀

猫あるゝも縫小鍋を折れ　碩

江戸酒を花咲ばなを寄のしかり　秀

あい乃山彈きを入逢　仝

雲雀啼里は厩糞かき出し　水
火を吹て居る禅門の祖父　秀
本堂ハまだ荒壁のあらゝ組　水
羅綾の袂しほりも兼ぬる　秀
歯を痛人の姿を絵に書て　水
薄ら〳〵とむすましき痩たり　秀
菱焼乃宮よ出る婿を捩とき　碩
口上果ぬいふにさまれ時宜　秀
乍しのびて小判一両かり草袴　碩
秋入神ある肥後の隈本　秀
幾日路も苦て月の入る旅衣紅　水
寸布子ひとつ縫くるゝ乃里　秀

訳山す元めし喰らはれて　水
呼かへすくも猫も海る寸　秀
子規はた小人町乃雨あかり　水
やしほの楓木の芽萌立　秀
萩乃ふ一露絡挟つる音ありて　碩
如来しる婦にまゆるこの玉乃ふ　秀

正秀　十九
珎碩　十七

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉の軒に行
かよひ瓦の窓をひらき心の泉をくミしりて十とせあまりなく
乃文字の関風をさけてあへて宗匠の家伝ゆるさすの筆
よせる歌この二三子序に於て此編にたし炭俵と名つくる
菴主これに口ずさみけり家人の手にもつ一句も芭蕉の
あんと志のた於て番に嬾のさかりやうなるを望ミてえらミ
なしつゝ今廉乃書の古きより新しき事をもて筆のかひ
いつる声乃かならす耳に入ともうつゝのうた乃め
ともの是に螺のすぐれたるを見てこれをなくして集の目
乃ふと出より秋の月をうしらしめと難けれハ序綴り
芸にあらて書をたはからの一二十年とも見る事にかへ
きつくす其の結をあゝたらし文にくぬき炭
の姿ミえしさひしき野鄙をかくし待るなり
詩乃正義にいへる五つ乃志なけるハ哀なる古きもの
それはひとしけと例乃日に流するなる山霜より
不知りつゝなりけるしきしき芭蕉翁乃三を逢り
やかくれたるを楽めて香気乃趣を数へられけん宗乃集の
るもふ及ぬ人のみたもの乃秋きこと補乃かきへもむき
炭乃ゆかる斧をとらしさはつるハ炭あつめとのつる
ハ鄙也さり乃枯らたる紙にも子共さそひてきし知られ
たるやも此志をえて蜘蛛ともをこの風にて筆ひ
序書てまた捨てはかれぬ世の時をとりかく金其勅を
析かな野鄙をのつかしそのみさきて炭をつくる謹ミて八

わらしのしとろゝをはくむ

元禄七乃年夏閏さつき初三乃日　素龍書

むめがゝにのつと日乃出る山路かな　芭蕉
處〃に雉子乃啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　仝
上乃たよりにあかる米乃直　芭蕉
宵乃内はらはらとせし月の雲　仝
藪越はなすあきのさびしき　野坡
十
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉
奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡
ことしは雨乃ふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋乃事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにや九ばかりのこる夕月　芭蕉
よ川人の葬禮掛て記ゝくる　野坡
寄秋おまふ居合ひらぬな　芭蕉
町衆乃つらりと酔て花乃陰　野坡
門で押るゝ壬生乃念佛　芭蕉
東風風に糞乃いきれを吹まはし　仝
たゞ居るやうに肱をかつらぬ　野坡

江戸乃左右むかひ乃亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどからぬ臼をかる　野坡
方々に十夜乃内乃鉦の音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印乃湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはまの雑炊　芭蕉
千どり啼一夜一夜に寒うなり　野坡
未進乃高乃はてぬ算用　芭蕉
隣へもしらせず嫁をつれて来て　野坡
屏風の陰にみゆるくはし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂乃かたまりて　野坡
外をざつくり囲ふ相撲場　嵐雪
細々と朔日ころの宵乃月　利牛
早稲も晩稲も相生に出来る　野坡

泥染をとるよ流のかたはん　嵐雪
ありこられて盃せんかなかろ　利牛
嫌かゝる衣と嫁を侍よらふ　野坡
てうくしくも参るこのわり　嵐雪
思谷内九ちらハ暑侍の護法　利牛
五百のうけを二度に流しなり　野坡
網ぬきれいがの紀ある旁え人　嵐雪
人のさりし幾里思ひきあり　利牛
離役乃鞍を下せて岸のふもとて　野坡
飯まれ中ある芋をおる月　嵐雪
漸と両縁やまて秋の風　利牛
鍛冶みてハ又鮓かく　野坡

君本ふのみかしゝお数も墨ぬので　嵐雪
抱揚る子の小役をさせる　利牛
くりかへしと河内乃蓑掛羨乃嶽　野坡
心みつろし着乃せん気なく　嵐雪
聟うち寄よく婿の世をも細まなり　利牛
こらしし乃九れハ何も嫌ひぬ　野坡
垂簾の神よ何とさするらん　嵐雪
叶ひい物の小屋こそふよる　利牛
黍乃穂ハ転れ風よ吹倒き　野坡
葛場乃喧嘩の終まする月　嵐雪
君ハとうし江戸に行て人になる　利牛
今年度やせんくらの伴と御風　野坡

ウ
賣手もうらうつて人のそだたる文証　嵐竹
呼かけしと中ぬのふり出し　利牛
鶏舎乃條き色れ走らるゝ　野坡
うしさむ文乃志られぬ細引　嵐竹
枝ある毎をとしめく家乃作　利牛
まきちらひ殘る正月の餅　野坡

　ふか川にまかりて
空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋
晝乃水鷄のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨ふりて　岱水
そつとのぞけハ酒の最中　利牛
寝所ハ誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀乃ころぶ秋風　孤屋
きりぎりす薪乃下より鳴出して　利牛
晩の仕事乃工夫するなり　岱水
妹をよい所からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛
鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて賣出す　孤屋
この春ハどうやら花の静なる　利牛
かれし柳を今に惜みて　岱水

宮乃紅吹そらし鳥の觜ヶ月　孤屋
ふとん兜りくくもの袖すひ成る　芭蕉
不審な藤とまり乃やうらすなり　岱水
まりちり場をとよへあそしん　利牛
浪うすの曲そん葉し咲ちる　芭蕉
盃をれてかけしとつ節ある　孤屋
芸のまんをうんてれ流を堂　利牛
家つを遠つくて捨らる桁　喜屋　岱水
今のまん事札取きとさまてとら　孤屋
手貢まんふとはなつれまくり　芭蕉
息さ　祖父の墓つかの花ときま　岱水
猿声すしま　七夕乃野つり　利牛
名月のまん合戦なしの芋畑　芭蕉
はらしくりふて花のよ蕎麦鮎　孤屋
ウ　このころき宿の通りもうすまきく　利牛
山乃根際乃鉦かれかたり　岱水
よこ雲ふアりよく風の吹出れ　孤屋
晒乃よふ日なり鴨　寂　芭蕉
花こんふして女子たちりかつ連立て　利牛
余乃九さきうしれ茎多んはし　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛

各九句

百韻

子をを裸父ハてゝれて早苗舟　利牛

岸のいばらの真白まさく　野坡

雨あがり珠数懸鳩の鳴出して　孤屋

与力町よりむかふ西かぜ　利牛

筭竹ふ茶袋乃絶たりよせ　野坡

こちの離れをかせく人あり　孤屋

蒼乃月干蕪乃茄汁かるき　利牛

掃も読のしり　檀ちらし　野坡

おしめきて此中でより物いりはあり　孤屋

坊されあれとやかりに平氏　利牛

松坂や矢川へはいれて通る　野坡

ゆるし勝もつきき関乃衣　孤屋

十二三弁乃衣装乃おとろひ　利牛

本堂はしばるまだとろく　野坡

日乃あたる方をあからむ竹乃色　孤屋

只奇麗なる白すくゑ　利牛

逃に路乃こしき洞を聞て　野坡

天氣乃桐よ三日月乃照　孤屋

鮭あらうと来ればおそむびこ湊　利牛

椋の実落る屋根くさるし　野坡

帯売乃衛を連立出九かり　孤屋

流氣術ころの人気をそろく　利牛

ほのかにしと二つ急乃いちはむ出　野坡

ほろほろと沖への鰆まつりあかるく　孤屋

なかい袖をふりくつろげる物おもひ　利牛
葉下網乃糸もきれつゝ候　野坡
浪しほる武士乃恋のつよさ　孤屋
尚おもふ今日もまた大野　利牛
切蟻の吟味しらる柾なるとこ　野坡
くわり納豆を仕出し廣庵　孤屋
瘡日にもましうとも待ころ　利牛
落て出かけるる紺の重さき　野坡
つましあれの名をいふくれ嘆きの　孤屋
ものてよりの青宍さき并の垂　利牛
かちれの身様は貢取る古柱　野坡
まはきしれ草これあまるとつてん　孤屋

ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸てうらみし水風呂や縁　野坡
伐透の樅と檜のすきあひて　孤屋
赤ひ小宮ハあたらしき内　利牛
濱とハ宿の男は荷をとうらえ　野坡
師走比丘尼乃諷乃をかしさよ　孤屋
餅搗は臼をとらし貰ふえて　利牛
天満の状をまた忘れけり　野坡
廣袖をうへにひつかる舩乃宿　孤屋
ぬく銀ふして来る歳暮　利牛
燃さる薪を見るも惜くて　野坡
十日丞毎乃ふりまりしすゐ　孤屋

内花にかきゆけ嫌の汝ともり　利牛

三

弦打颪海雲とる濱　孤屋

機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡

小昼のころの室は静し　利牛

縁端に膝する兄を呼出で　孤屋

謡乃講うけを念入てけれ　野坡

麦畑の溝堀に渡る清水杭　利牛

賣へても志れし新殿の守　孤屋

拾舟もる相まなれたれさふ　野坡

又此肩の古着いしをき　利牛

岐まるなんてへ上れと二町跳　孤屋

夕ふやくんのく嶺ゆかり　野坡

花茶乃こまかに初ままを際出し　利牛

一つくなりに雛乃雲揚　孤屋

誰待しに蕨引ちぎる鮓乃肴　野坡

なめすてむる寺乃嫁あたり　利牛

めをと縫く無理に隔る騎の数　孤屋

又たのみして美濃たよりきく　野坡

かくさまと中の巳待をまつるゝ　利牛

入来る人に味る豆を剝く　孤屋

まちこかねま市郷給乃新田川　野坡

此茶屋乃みゆる宿乃わき　利牛

ほ也しとさんとほとゝす雲ちされ　孤屋

灸葉に餘りかしる熱けし　野坡

寺乃内引越て居る樫原　利牛
尻軽にする返事よく　孤屋
おちつくるくらし時乃鐘乃音　野坡
入舟つゞく月乃六月　利牛
拭さくお上の座居ひらける　孤屋
当云つめる細うりのひ　野坡
名オ
大水乃あとに畑乃砂のけて　利牛
何年菩提しらぬ祖乃事　孤屋
嵐今さら同心乃あらそと嬉　野坡
丸九十日湿をわづらふ　利牛
投打もなしに立すくにみさし　孤屋
定たらし秦参登よ借まで来る　野坡

里離れ形状引乃かゝつおく　利牛
やたらこのものを嫁の襟かけと　孤屋
さまよひくる納月ちまの精進者　野坡
うんち果しる八もんたき　利牛
丁寧に仙臺俵乃口のくり　孤屋
訴訟乃済て土ゆみよる筋　野坡
夕月に醫者の名をきゝつけり　利牛
包て居る鮭乃やきもの　孤屋
名ウ
宮先を今年来風に欲かで　野坡
もとや仕事もならぬ相かへ　利牛
暑瘧の誹判をとうかさせうり　孤屋
蔵丸ぶりてこゆる雲　野坡

減もちぬ淡路屋乃こゝせ乃戸さし　利牛

門迄垂れ町乃桐の落　孤屋

彼岸まて寺乃花の咲ふく　冊波

三人なくうちのしろき菜　[illegible]

春之部発句

立春

蓬莱よ供えてや江戸乃初便　[illegible]

東風や古き十年の春の朝　猫子

みちのく乃人も関都へ京の春　秋風

春や猶丹波の来ても海とて　［落柿］芝来

なさけ供もつき小山の城乃春　［落柿］正秀

いそうしきまちを雀乃かきそふ海　［大坂］洒堂

喰つみや本色のにおひの梅の花　然水

梅いきつき門徒坊さ也る夜の花　洒圃

間十にも村乃祠や年の暮　孤屋

初日新玉を立もつまつきらや　利牛

若松に親の名残く来る北の海　師坂

梅

梅一本つきし家もそうな　露沾

むめ咲や畑乃桃の木のよき方より　曲翠

むめの香れ暮に立すみその具　支考

宿れうちと見えてうらく

むめちるや京本家也日乃白糸　［伊賀］土芳

梅咲くや湯屋乃山開き付て分の　利牛

赤みそ乃日を煩ふ嵐山乃花　游刀

みなしろ咲てむかふて梅乃花　埜坡

白梅を娘すかれる妻戸乃部　杉風

我ふとしも乃七くさそへとて

なくさるも薺は白へる薺かな　其角

七草や猿ひきうけて切刻ミ　埜坡

うちむれて若菜摘みに胜ゆし　仙杖

返り乃文乃そへしに

織月一足ても行く書こう　去来

大ちろや嫁乃出くまふ織月　信 丈草

おそろ月すこしまさまさひ 花　仙花

涼川乃まへ

ちやさや宝乃跡りも三ケ一　利牛

十五日ゑや朧月乃古手籠　大坂 文角

猫乃夜初手ゝ鳴く声こし　埜坡

ねこのこのくんつほぐれつ胡蝶かな　其角

鶯

うぐひすはほうと鳴ける軒かな　嵐雪

鶯の葉をしへん谷の文　千角

うぐひすのあまれ我ひ 枝の花　桃隣

うぐひすや門をたまかく豆鼓売　埜坡

鶯や一声も鳥をのまなり　利牛

柳

こねりをもつらして植し柳哉　似英
陰にごし月のまひらん柳かな　素龍
五人ぶちとりてしだるゝ柳かな　野坡
せきれいの尾ハ又青さる柳哉　一風
町なかへ走るゝ宿乃柳かな　利牛
傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

土をらふ鑵にちり込椿かな　孤屋
枝ながく伐られぬ竹を椿かな　湖春
念入てふゆからつぼむ椿かな　田賀
藪にうきみみせて咲つばき　嵐雪
鶯のねも隠れ家の奥椿　支考
たちよ掃除してくうら椿散ほどの　野坡

花

うへの花見にまかり侍しに人々幕打さはぎものゝ音小うたの声さまざまなりけるかたはらの松かげをたのみて
四つごきのそろはぬ花見心哉　芭蕉
めつらしや内で花見ん初ざくら　杉風
うかうかと来ては花見の留主居哉　丈艸
何かしの僧都の庵主花見に侍りて
中下もそれ相応の花見かな　素龍
花さるや白きのしらと実はなせ　去来
朝めしの湯を沸す膝や庵の花　孤屋

あくもと云花見の雪乃かくさかな　荊口
たふれても柳のこゝいきる若葉かな　斜嶺
梢の鶯鶯山より出や花の中　北枝
牡丹ちく人まや花をはさのり　湖春
あだなりと花に五戒のさくらかな　其角
花いまも毛虫にかゝりし家桜　此筋
やまさくらちるや小川の水車　膳所 智月
老僧も鶯鳴出さる花見哉　大坂 之道
海苔舟の花に雉鳴る霞かな　祐甫
山桜芹川藻これおなごかな　越前 昔全
昆布かしや花まゝのつく庫裏坊主　利牛
おちつきも魚やまよや桜かな　仝

折りくる桜とふくや春庭所　孤屋
ふぶきにてあそぶ日なくて花見哉　野坡
倉の間みふあつまるや山ざくら　仝

上巳

年毎の花川乃なかれて汐干哉　沾徳
蛤のあまりかゝるやしみの桃の花　桃隣
うつくしの橘もいつれ出の雛　其角
雛乃子に傑をぬるるひなかな　この 如行
日半路をてられて来るや桃の花　野坡
麻の種毎年蒔て桃の花　利牛
藪垣やつる乃白かくもゝ乃花　孤屋
青柳乃泥にしたるゝ汐干かな　芭蕉

濁つかま令年云む小あゆゆふ　支考
まち甸や椎の葉つゝみ風の漏　芭蕉
若ねおるつしの葉や二之むし　子珊
はさりしところみ競門のつくりけり　怒誰
冬乃りやけ乃く陽や秋乃赤　桃鎰
うすおとさし菱の葉乃麦乃嵐かな　仙華

旅行 并く

法坐場吉姨より月をすゝされけり　野坡
此葉いなき半みのは瓢屋旅之
すけりのれ両手てみ送りく　野坡
雲霧をさてやへ行もおゐ可しらぬ　野坡
旅さくしぬき泉をさりなを名　利牛

夏部之發句

首夏

塩うをの雪ほと見る衣かへ　嵐雪
衣かへ十日はやくえ出かはり　野坡
綿をぬく旅ねはせはし衣更　九白
裄よりやれきく綿やし衣かへ　雲芝
苗のあしとけさまほとの蒲りけり　子珊
麻屋の暖簾白し衣かへ　利牛

うの花

卯の花やくらき柳の及こし　芭蕉
うの花の絶間たゝかん闇の門　去来

旅行 并

うの花に芦毛の馬の夜明哉　許六

卯の花も杣かりそやかつらみけ　支考

鄙しらん

棹の歌さやそう涼しめじろ鳥　洒堂

紫花紙池に蓮ある古居ふ　素堂

うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

ほとゝきす二階にねても聞れ　桃隣

ほとゝきす一二の橋の夜明かな　其角

竹嵐と身をまかせんほとゝきす　嵐雪

挑燈の空に詮なしほとゝきす　杉風

木かくれて茶摘も聞やほとゝきす　芭蕉

まつ雲や母なつかしやる子規　素堂

附句嬉しし風が雨になる　利牛

子規藪の出はれぬ梢かな　野坡

麦

榑ちるに麦穂いやしや泥どり　その撫口

麦の穂に青ふりまくや筑波山　千川

麦跡の田植に逢れ蛍とぶ　許六

籠の糀りを川さきあつて遣て

刈てみし麦の白地や扇の月　利牛

おなし附句

麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡

おなしくその後

涼風やまくれてのる幟のたゝみかへ　芦水

端午

五月雨や傘に付たる小人形　其角

さし鯉に動くみゆるやはつ風の色　大坂 洒堂

五日あつくあやめすみかふるあやめ哉　桃流

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みどりやき首の骨より甲着　仙花

雛子の声さぬき鮎る袷かな　素龍

夏嬉

並松をみての其町のはづれかな　臥高

枝葉にて昼寝ありし見世哉　針泊

二三夜難きに寝もなくあつさ哉　芙?

そのけ山の力及ばぬあつさ哉　梓離

すゞか池やどぼく青き葉の色　芭蕉

此句は清田より此段に入

五月雨

はゝられやとなりへ舟の丸木橋　素龍

五月雨の気色やよど川大和川　桃隣

さみだれは小鮒をふきる子供哉　北枝

五月雨や家に寂まにかゝる蠨蛸（ヤマコホウ）　嵐蘭

この句は桃隣より云おこしぬ

五月雨や龍もまつらぬ鍋の本　越人

涼

川中の根木によころふ夕涼み　芭蕉

月影はうごく夜や水のうへ　ラ由

涼しさよ寐ままよさる竹の露　卯七

川船とおいくくとするすゝみかな　探芝

清風をすゝれて涼し子[illegible]　智月

すゝしさを忘れし柄杓の雫かな　几峯

すゝしさや湖の上北[illegible]　玄来

夕まくれ美[illegible]おかしき[illegible]　丹波

三ヶ月の涼しくてすむ[illegible]　素堂

蠅しらす

橋や家机のあたり　杉風

屑や計むくや磯草すゝしき[illegible]　岱秀

世の中や雷鳴の[illegible]　黒去

早乙女[illegible]　嵐雪

春雨[illegible]

山吹も巴も出る田植かな　許六

ひるかほや雨降しらぬ花の色　智月

また山や人もすゝみぬ[illegible]　小鯤

[illegible]　乙州

[illegible]　丈州

[illegible]夕やみの[illegible]　仙花

一いきれ蝶[illegible]　楚舟

[illegible]　残香

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

けうしとふハ樹も栖や雲の峯　祐甫

一枝をすげなき竹のわかばかな　仙花

竹乃子や児の歯ぐきのうつくしき　嵐雪

さるつき人　僕ら酒と打しむるとかく
我がゆりて深せしむ志らんある舎に
それをすく名くあしき?ゆかりと
名あるかなりとこれ出くあり?せられ
それ汗をかきまく

はく酒よ君のつくあつさかな　利牛

ある人の別業にいざなわれ蚊を考?
て橋さりしを為るとおのことをたのみ断て

ゆきをとねさのかさみすや夏座敷　野坡

穐之部

名月

秋のかりねのさびしの才ノイ
月を揚て吟作の声をきゝ字す

名月やいつみても君が秋一よさ　游刀

名月や揚(ミコ)見まりん森の虚　去来

家買てことしる人初る月夜かな　荷兮

名月や雑炊錦の傘の端　洒堂

松陰や生き籾揖平江乃月見　里東

月乃海乃橋乃ひゞきよ今宵月　利牛

あれこれつ夢すてことき夜の月　其角

むさしの件秋のくさしめて見ゆる

望峯ノ不盡筑波を

晴月や不二つ見ゆるとする町　素竜

七夕

笹の葉に枕付てや星むかへ　其角

星合をまちえて我や蚊の縁　孤屋

七夕やふりかゝりたる天の川　嵐雪

盂蘭盆

うりきりまかり新やたまゝつり　洒堂

踊るへき所もかくや碑に月　呉 李由

盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡

胡鳥

岡園

胡鳥や空をかすめん門の垣　芭蕉

胡鳥や日和定むる紀乃垣　利合

一しきり物いふて去ぬ柳かな　沾春

秋虫

手に入れて鳴かぬや籠の蟋蟀かな　大津 智月

悔りし人のきれや籠の鈴むし　丈艸

蟋蟀の啼やみて後ぞ鳴ぬ　さゝ 野有

こうろきや寝て起て後の上　孤屋

雁

友雁乃帰をよへくの人の下雁か　車来

人のかよりて

雁のふむ蕗や硯の砂の月　古郷 素鷺

旅行のもとよ

追はゝやすゝむ声の雁の声　土芳

草花

うら枯野乃萩や夜より秋の花　桃隣

花すゝきころ〳〵ちるや村さゝら　野竜

伏見乃萩や刈かん稲の端　猿雛

芦乃穂や良搔揚る夜こゝろ　丈艸

あまたはなさく

芦乃かよ名有川なきや宮の端　去来

山中の茸狩をみて

茸狩や鼻のさきなる歌かるた　其角

園菊

菊畑おくある霧のくもり哉　杉風

晩菊も名を咲出ぬ九日かな　桃隣

秋植物

柳のあるなをとゞむるの若さころ　利牛

葛蔓や谷よあつかる亀の甲　許甫

秋風や茄子乃葉のあしかゝく　木白

算ふま手かく窓よりかゝく孫の枕　孤屋

さうかしの名を南雲かしよの宮へ
られかし法無南ゑんまくひさしりしやみや
未詳なまつき天のそきさうら尺八寸あり
あてよるハをのかがちをとこのかる人の
まくあそひてもゐくるあるへし〳〵三絃
やすて
うら名目ハ地うむよれ有乃かてゝあれハ
天賞自然の理さらりし収むへるかれ

畫とさるや石基にめせられたく竹根
のうしのさまあるハ上に此住合ことそすれハ
すりたちのきれそこぬけ乃つくへ土うけれて
土乃くされ二階のつま柱りしのひみけるを
とのめるあとあやうくみな佇るを朝臣の
もうあき女ひすハされかく抱りおきを大かたハ
うら紙つり錢のまそろおもてようしつ本
てりん本梢の目どうつをみきなかおり
金葉乃ときらと見出されおそくハ
落こ夏鼓乃比紅葉乃色をとみするを
姿その頂上とせりうくハうへとある人
小冊りうての海きりしみち乃おとうの

小春とはこゝ乃一ねそれそあんちうきどにと
ひとつみのうしを示すせしまりのと云ハ
いやしめらるゝきみもおのれ志らしいまハその
人くも此世をときりつれそれよく見きを
さのむへりれうしきかもみまごへうしをと
小序を志るのよ

石基をぬけり根こきや磨りし
鼠しられ　野坡

あら撲取あしぬしや秋のしらゝき　岸宮
手ら風呂れ下や案山子の庭　丈草
塩ひとりよき淋抱乃白ひろ私　酒堂
秋のくれいよくうまくなる才川　魯町

蕣種や蔓草も咲ハ嬉し気　利合

夕良の汁ハ秋しる[illegible]哉　支考

くる秋ハ風ばかりでもおそろしき　小枝

秋風に蝶やあはれなき池の上　傍 信々

庖丁の片袖くらし月の雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落る[illegible]　桃隣

冬枯の磯に今朝見る[illegible]　芭蕉

[illegible]や薪[illegible]こぼれく　支梁

旅の空の[illegible]や[illegible]　斜嶺

刈株の[illegible]雀哉　羽実

凩に藪のしたゝる小家哉　沙香

初雪や猫の毛も立寒さ哉　曲舟

凩や髭ふけさ猫の面　八桑

[illegible]山に[illegible]

木枯に根まで吹かれ付[illegible]哉　桃隣

箒目に家の[illegible]のさむさ哉　游刀

時雨

芋倉の猿へらしける初時雨　荊口

見えけり沖の時雨[illegible]　太少

芭蕉翁をおもふ[illegible]

[illegible]時雨[illegible]　斜嶺

なら陀とくみもえ広しし九き哉　許六

　　鰒ねのころ

小松原とふりの卯を枕やらぬ　野坡

　　大根引といふことを

鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉

沙魚をとしれんぼ荒て大根引　野坡

神送荒るゝ雲の大大根　西堂

　　はむさといふ下の五文字をすて

人声の夜半を過るさむさ哉　野坡

この比を先核杉もはむさ哉　夭蜂

薦着にて吸物もなき寒さ哉　利牛

足かとも寒しさてこまる釈の声　我眉

奥底や菰うち上て冬の月　里东

　　大の二白をふり川の底くをとつれし
　　他国よりの旅のやとりにまかりかゝりてみそく
　　今ゝまま出しけり

雪

まつ白にふしとふりを敷てあまりけり　野坡

初雪に人くるやとるの泉さらさら　利牛

せりかるや堀の山崩れの芦の葉上　買山

雪の日は居侍(カイフ)を鶺鴒(こツせくい)　信ゝ

雪の日やとかくしてはつるかつ物　猿雖

冬の寂しさ残の寺たりく

杉のはしは古き掛けし夜の露　支考
朱は鞍や作りかへりの古き詞　小枝
はつあらや生まる風から涼しむる　許六
若葉は横町さゝる古び水　汲夕
海山乃名所うへる古びこそおれ　乙州
江の舟や曲突にてうする古路警　素錦

歌ふる

わびしさは鍋に折し込枯柴かな　呂丸
霜は菊や杉糠のうる臼の端　芭蕉
禅門乃草履袋やつの十夜かな　許六
氷やら焼乃盆わてる衣村かな　智月
白魚のおるゝき白ひや杉の香　之道

榾の火やあかつき方の五六人　丈草
庚申やむしろに火燵乃あるゆゑ　許香
涼しき縁組すんでこそ神無月　其角
海つ鮮や鯨や一ツ木の波の音ましとくさ　仝
煤はきは己が棚つる大工かな　芭蕉
煤掃やせうしをとくハ代々かな　万平
餅つきや元服さする草の庵　野坡
山郷の見るまに出る誕生の　嵐雪
侍者や氷にまじるおこりかな　智月

歳暮

こゝろあさ文字かへし日の本　杉風

そのまゝぬ筆文もけふの年の暮　李由
おしなべて鶯一羽としの暮　智月
絹あさ乃けむりしさよ年の暮　孤屋
としの瀬を急ぎしらぬ俵かな　猿雖
年乃うれしさ来ても流れひ　野坡
芭蕉よりの文のうれしさ乃年
いつもとはちがふ年のくれ
旅なれて心やさしや年のくれ　嘉ろう
行年よおくりてくれし株ひとつ　沾圃

誹諧秋之部

秋乃空尾上の杉に離れたり　其角
おくれて一羽海わたる鶴　孤屋
朝霧に日傭揃る貝吹て　仝
月の隠るゝ四ツ門の跡　其角
祖父ヵ手乃火桶も落す寝入はな　仝
つらひ反古を丸をころばし　孤屋
下京は宇治乃糞船さしつれて　仝
坊主乃宿に蓑ハおもしろ　其角
足拍子して飛ぶハやかり　孤屋
息吹かへす霍乱乃針　其角
田乃畔よ早苗把て投て置　孤屋
道者のはさむ編笠乃節　其角

ゆ焼乃引出しさびれちらし酒　孤屋
新よ抱へさうして〻ぬ乃ゑ　其角
鈴縄に鮭乃さかれハひしれし　孤屋
暦れにも袋なかり髭し　其角
君の乃梅漆桂乃花かみち　孤屋
むかしの子ありきのせて宝　其角
いさん沼なき全はつかひ居　仝
美乃縮め〻あらしきし内　孤屋
夜芋はふさかされてやれ〻　其角
あけさとゆへも小僧いや〻かれ　孤屋
手の良寒梅乃横も首ちつて　其角
常とさなかり〻風呂まみ川　孤屋

君こねえこりれ酒青乃盃なる〻　其角
稗と酒もの行詰つる盆踊　孤屋
幸済へ雀のつゐる秋乃くれ　其角
小より冷れ月乃雲行き　孤屋
祇婿しく〻来かり酒の残　其角
上塗なしまほく坪く硯　孤屋
香小栗清む行音ナキせて〻ゆる　其角
夕ざもなくつく深前乃うね　孤屋

孤屋旅立けるに餞別として

吟月赤満ちして吟終りぬ

其角　孤屋　表十六句

天蟲戌興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣

どんどと水の落る秋風　野坡

入月に夜はほんのりと明はなれ　利牛

塀の外まで桐乃ひろがる　桃隣

銅壺よりなまぬる湯出てつかふ也　野坡

つよふ降たる雨乃こやむ　利牛

瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣

近くに居れど長谷をまだ見ぬ　野坡

年よりのさがと常住ねがふなし　利牛

いつよりもさむいは十月乃おちら　桃隣

壺なりしやき築地まくらき　野坡

なよなよとした嫁乃仕合　利牛

ちんからと西へは降るかんかん　桃隣

詫おてゝうりとる夕月　野坡

附なりし見納仏きこゆる盆の日　利牛

晩からつまりて手もく身を殺し　桃隣

人の拙買ひ始で築穴に罷らち　野坡

もちや浮生もさめ月の節　利牛

より平仕様にかゝ桶ハとりかゝて　桃隣

むぐの乃かてとされもてんぢん　野坡

買過ぎて薪て方解さしちゞく　利牛

踊るからしきつ遊さらつく　桃隣

此頃の業をさくして秋のさか　野坡

杉の木末に月のかたふく　利牛
同じ事老の咄しのあくどくて　桃隣
だまされて又薪部屋に待　野坡
よいやうに我手に占をしてみる　利牛
しやうしんすれておもぬく蘭　桃隣
帷子も二肩にうしらぬ暑さにて　野坡
京にて惣別家に気入　利牛
名
焼物に組合さする富田鮓　桃隣
隙を盗んて今も稽てなる　利牛
鍬かたに一雪錯とする芒まきて　野坡
先沖まではみゆる入舟　桃隣
内へはいる菜の葉かへてもまの膳　利牛
ちりかゝる風のかたぬまかさ　野坡

神無月廿日ふか川にて即興
振賣の鴈あはれなりゑびす講　芭蕉
降てハやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物の餅を絶さぬあきの風　野坡
割木の安き国の露霜　芭蕉
網の者近つき舟に声かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊軍の大事なり　芭蕉

淡氣乃雪に雜談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹げして　孤屋
痃癖にはる湯屋の膏藥　利牛
上をきの干菜刻むもうハの空　野坡
馬に出ぬ日ハ内で戀する　芭蕉
絈買の七つさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此嶋の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖のうつる青草　野坡
新畠(ハタ)の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帯しの水をあぶながり　野坡
平地乃寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどく也　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ産(ヨロコブ)　野坡
どさくさと大晦日も明の空　孤屋
せめられてのむ状乃請さき　利牛
中よくて傍輩合の借りいらゐ　野坡
壁をたゝいて寝せぬ夜内　芭蕉
風やみて秋乃鴎の尻さかり　利牛
鯉の鳴子乃綱をひかゆる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉

闇の夜すがらのつれの行ちがひく
野坡
さくらまうも春乃三月中時分ゝ
孤屋
縞炭俵ちりをそらにまふ風
利牛

芭蕉　野坡　孤屋　利牛　各九句

雪の松おれ口みれば尚寒し
杉風
日の出るまへの赤き冬空
孤屋
下肴を一舟浜に打明て
芭蕉
あいさくるし大名の供
子珊
身にあたる風もふはつく薄月夜
桃隣
粟をかられてひろき畠地
利牛

ゥ熊谷の堤きれたる秋の水
岱水
箱こしらへて鰹節売る
野坡
二三疋寒様かりし蜘門の絲
子珊
るゝ乃若抱のさいる二十ある
沾圃
竹の皮雪踏に替へる夜はまで
石菊
稲よするのさん乃雨乃もろく
杉風
手ぬぐひ割れ一人もみえぬ浦の秋
野坡
めつらしき風のさまてる色色
利合
寒し乃肩をかゝらして旅大工
依々
背中への切る児をとゝ八ゆる
桃隣
茶幽しられきこふく上ずぬちーて
子珊
川うらそくは小舩いくしする
石菊

鈴白雲にされてくらき俵まきて難手覧　杉風
芸りさへ占れて出てゆけりから　岱水
曲物りむ角で揚て歟わり　孤屋
三の集奴んでハ女房稽古白　為良
膝茶を擣く借くてうり迚　桃隣
わざしけりなく葉代の花　依々
宮島でふくバと自慢てきちし　沾圃
とるかへりくのどとらて来る　子珊
又けさも御の会く坊を増　利牛
頬てうりして買てがれく　杉風
大読れ人にすれる年の肩　利合
昼をとゆれて花毎の下人　野坡
手みぬる花前の箱のあけつる　子珊
吹れ小税出てつるむせるあ丿　利牛
打乗るうしろみて居れハ路に参られ　為良
七ツのうねゞふ加ら名残坪に咲れ　杉風
念のあるとふ御る降出しく　桃隣
男ましりふ蓮そろゆる　岱水

杉風	五	野坡	三	孤屋	二
沾圃	二	芭蕉	一	名菊	二
子珊	五	利合	二	桃鄰	四
依々	二	利牛	三	為良	二
岱水	三				

撰者芭蕉門人

志太氏　野坡

小泉氏　孤屋

池田氏　利牛

猿蓑

晋其角序

俳諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起すべき時なれや幻術の第一として其句に魂の入ざればゆめにゆめみるに似たるべし久しく世にとゞまり長く人にうつりて不変の変をしらしむ五徳はいふに及ばず心をこらすべきたしなみなり彼西行上人の骨を拾ひて人に作りなして声はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されける人には成て侍れども五の声のわかれざるは反魂の法のおろそかに侍にや さればたましゐの入たらばアイウエヲよくひゞきていかならん吟声も出ぬべし 只誹諧に魂の入たらむにこそとて我翁行脚のころ伊賀越しける山中にて猿に小蓑を着せて誹諧の神を入たまひければたちまち断腸のおもひを叫びけむあたに懼るべき幻術なり これを元として此集をつくりたて猿みのとは名付申されける 是が序もその心をとり魂を合せて去来凡兆のほしげなるにまかせて書

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨来る夜の鐘の声　其角

時雨きや並びかねたる魦舟　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧丈艸

鑓持の猶振たつるしぐれ哉　膳所 正秀

廣沢やひとり時雨るゝ沼太良　史邦

舟人にぬかれて乗し時雨かな　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曽良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆

馬かりて竹田の里や行しくれ　大津 乙州

たまされし星の光や小夜時雨　羽紅

新田に稗殻煙るしくれ哉　ゼゝ 昌房

いそかしや沖の時雨の真帆片帆　去来

はつしもに行や北斗の星の前　イガ 百歳

一いろも動く物なき霜夜かな　野水

淀ゆく

そふしほれ何をかたれる夜の中　其角

嵯峨苑乃跡にも志ろ人埜塚し　同

禅寺の松の落葉や神無月　凡兆

百舌鳥のゐる野中の杭よ十月　嵐蘭

こからしや頬腫痛む人の顔　芭蕉

柊下けや鉢たゝきのあそぶ冬至　凡兆

なにはにて

棹鹿のかさなり臥る枯野かな　イガ 土芳

渋柿をなかめて通る十夜哉　ゼゝ 裾道

ちやのたねや作りて人の三夫婦女　越人

このはしら乃菜の花ゆへに積ましるの　イガ 猿雖

古寺の簀子も青し冬かまへ　凡兆

八瀬の咄に宇治をとほりく

雑炊のなどころならば冬ごもり　其角

この冬き牡丹のなれの果の裸　伊賀 車来

草津

晦日もるいつくもひのこゝろかな　尚白

氷る水にそらつる法師哉　珍碩

霜月朔日

猪すゝり外は酒なし赤柏　伊賀 良品

乳母に月の水を経る仏事　羽州坂田 不玉

今ハ世をたのむけしきや冬の蜂　尾張 旦藁

下咒のこゝろかれぬ溝白鳥　去来

一夜〳〵さむき姿や釣干菜　伊賀 探丸

みちのくなれ多賀の城のこゝろざし　尚白

茶湯とてつめたき日にも稽古かな　江戸 亀翁

炭竈に手負の猪の倒れけり　凡兆

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉

寝ごゝろや火燵蒲団のさめぬ内　其角

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆

木兎やおもひ切たる昼の面　尾張 芥境

こゝつくハ眠るまどをさされけり　伊賀 半残

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり　丈艸

浦風や巴をくづすむら鵆　曽良

あら礒やはしり馴たる友鵆　去来

狼のあと踏消や浜千鳥　史邦

背門口の入江にのぼる千鳥かな　丈艸

いつとろ雪にまぎれて鳴千鳥　千那

矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥　凡兆

筏士の見かへる跡や鴛の中　十節

水底を見て来た顔の小鴨哉　丈艸

鳥共も寝入て居るか余吾の海　路通

死まで操しらん鴛の妻　昌房

襟巻に首引入て冬の月　杉風

この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

かりそめの蒲團ひとつや冬の旅　暮年

見やるさへ旅人さむし石部山　大津尼 智月

翁の御衣を衾をあたへらるゝ時あり喜し

首出して初雪見ばや此衾　竹戸

題竹戸之衾

るてめそゑれふあれも紙衾

鼻のうけ鶴乃やるせなき氷かな　探丸

古川にさえをと粉鱒も栢のあみ代る　丈艸

傍自称に候さ

膝つきにかしこまり居る霰かな　史邦

棕櫚の葉の霰に狂ふあらしかな　野童

鵲乃橋よりこぼす霰かな　示蜂

呼かへす鮒売見へぬあられかな　凡兆

こうれ溶る音や朝飯の出来るまで　膳所 畫好

そつとや門に飛さくらぶ人は誰　其角

初雪に鷹部屋のそく朝ぼらけ　史邦

霜やけの手を吹てやる雪まろけ　羽紅

わきもこが爪紅粉のこす雪まろけ　探丸

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

なかなかと川一筋や雪の原　同

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し　芭蕉

草庵の留主をとひて

衰老は簾もあげず庵の雪　千那

雪の日は竹の子笠そまさりける　尾張　羽笠

跡くしも鏡なくして雪のしらむ　長崎　卯七

ひつかけて行や雪吹のてしまござ　去来

青亜追悼

乳のみ子に世を渡したる師走哉　尚白

から鮭も空也の瘦も寒の内　芭蕉

鉢たゝき情を薪に似せかへの　乙州

一月は我に米かせはちたゝき　丈艸

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

そば季作るまでのことをかくまる抱し　膳所　須琢

あしやうちてうすしききさうき揚し　曰　祐甫

乙州の新宅にて

人に家をかはせて我は年忘　芭蕉

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角

出物の衣や[illegible]小袖縫　長和

うす壁の一重は何か年の宿　去来

くれて行年のまうけや伊勢くまの　同

大としや手のをかれたる人ごゝろ　羽紅

やりくれて又やさむしろ歳の暮　千那

いねいねと人にいはれつ年の暮　路通

年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角

夏かけし果るを待や時鳥　木節

野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉

時鳥けふにかぎりて誰もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野の門構　凡兆

ひる[illegible]鳴る雷　智月

蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦

入あひのひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす滝よりかみのわたりかな　丈艸

心なき代官殿やほとゝぎす　去来

こひ死なば我塚でなけほとゝぎす　遊女 奥州

松嶋一見の時千鳥もかるや鶴の
毛衣とよめりければ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

うきくさをさらりとうなかへて哉　芭蕉

旅館庵せばく庭寒をとりて
若楓茶いろになるも一さかり　膳所 曲水

四月八日詣慈母墓
あらふらしうくる若葉の哉　其角
若葉のくれぬ花を牡丹の姿外　江戸 全峯

別僧
ちるさきの花やとさよ菜嚢花　越人
知る恩のあるる人かもとえ見しれ花　孫根
ゑみに待られてすみありてまつりさるて　江人 杜国
似合しきけしの一重や須磨の里
まくらさき自ひも伸のしろしの花　嵐蘭

井ぬすみ涼しく清し杜若　半残

起出くあまきされぬ躯のちの
起しのびうこうれかりさ川そて　仙化

頭去来ヽ深澤落柳舎二句
豆植る畑も木部屋も名所哉　凢兆
破垣やわざと鹿子のかよひ道　曽良

南都旅店
猪のかくなからの鹿の園の桐　千那
洗濯やきぬにもみ込柿の花　尾張 薄芝

豊國にて
竹の子の力を誰にたとふべき　凢兆
ふみけかくるや自畠濡に寒さらう　去来

たけのこや稚き時の絵のすさみ　芭蕉

物よ吹くへさかりしこの風　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉

君か代や筑摩祭も鍋一ツ　越人

五月三日ころ申しける家にて

風も香し並ふみける菖蒲ふ　其角

粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉

隈篠の広葉うるはし餅粽　江戸 岩翁

さかりしきれ客人やよまつりに　尚白

五月六日大坂にちる死の書簡を昇ひて

大坂やみぬよの夏の五十年　伊賀 蝉吟

奥州高館にて

夏草や兵ともか夢の跡　芭蕉

這出よかひやか下の蟾の声　同

此境はひわたるほとゝいへともここはあのくにのさかひや

かゝる所の穂になりけり稲石　同

雲ちる所に家ありと捨て蚊めくつ　丸兆

の稲夏は味はさるやまひ月夜　木節

る士の絹の汗なりさつき雨　史邦

奥州名所の跡に入るに壺の碑の塚ハ

いつくにあるもしらて道より一里ま

たかり花りの万葉集にいふあふくまと

おほゆりつきそのあたりを過てまいり

あつくなるに

紫陽草やいつこあかりぬ道　芭蕉

大和紀伊のさかひはてなし坂にて往来の順礼をしめくしるかきくあれりれて杉苗つてきる紙のはしに書つけ侍る

つくりもなくてなし坂や五月雨　去来

髪剃や一夜に金情て五月雨　凡兆

日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉

縫物や着もせてよこす五月雨　羽紅

七十余の老醫みまかりけるに忌中なから

こゝろてかくまてれいをみのるに

けふその老醫のさかりし御祥をさゝふ

見しれる人にわかされけれは忘れ侍らし

ましれとて古来まれなる年のくれ

そとゝめくゆうつりけりけれ

六尺も力おとしや五月雨　其角

百姓も麦に取つく茶摘哥　去来

たうとさや茶山しもふ麦藁つれ　正秀

つゝみ合ふ田にたれぬさけや麦畠　膳所　游刀

縁を愛して

麦藁の家してやらん雨蛙　智月

麦出来て鰹迄喰ふ山家かな　江戸　花紅

白河の関こえて

風流のはしめや奥の田植うた　芭蕉

出羽乃宿老上るとかく

眉掃を面影にして紅粉の花　仝

法隆寺宝物聖徳太子の[illegible]を拝して

[illegible]もつまたかつし紅粉の花　千那

田の畝の社里つゝみけり蛍かな　伊賀　万乎

於曲水之楼にて

蛍火や吹とばされて鳰の闇　去来

勢田乃蛍見二句

目に残る吉野を勢田の蛍哉　丸兆

ほたる見や船頭酔ておぼつかな　芭蕉

三[illegible]無く消てけり[illegible]

蛍火やこてふ[illegible]き八鬼尾八合　長崎　田上尼

[illegible]　尚白

草むらや百合を中にして花の色　半残

病後

[illegible]りやかしらあつく百合の花　大坂　何処

[illegible]百合の花　乙州

[illegible]を[illegible]りて

[illegible]の母も[illegible]の[illegible]　嵐蘭

餞別

[illegible]や[illegible]旅の宿　膳所　里東

[illegible]人に[illegible]れて

[illegible]してみ[illegible]

[illegible]　其角

隙明や蚤の出て行耳の穴　丈艸
下闇や地虫ながらの蝉の声　嵐雪
膳所
客ぶりや居処かゆる蝉の声　探志
頓て死ぬけしきは見えず蝉の声　芭蕉
伊賀
しづかさや青麻刈る岸の海　槐市
渡り懸て藻の花のぞく流哉　凡兆
舟引の妻の唱哥か合歓の花　千那
白雨や鐘きゝはづす日の夕　史邦
素堂之蓮池亭
白雨や蓮一枚の捨あたま　嵐蘭
日焼田や時々つらく鳴蛙　乙州
日の暑さ盥の底の蠛かな　凡兆

水無月も鼻つきあはす数寄屋哉　凡兆
日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀
ひとく暑し離るれハ壁の陰　木節
しねんこの藪吹風をあつかし　此筋
夕がほによばれてつらき暑さ哉　羽紅
江戸
青草ハ湯入ならしの何さ哉　巴山
千子が身まかりけるをきゝて、みのゝ国より去来がもとへ申つかはし侍ける
なき人の小袖も今や土用干　芭蕉
水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　嵐蘭
しゝらくに寝れハ涼しき夕へかな　宗次
おとしけや沢菜つむよ蓬ひの　凡兆

唐土に墨つく児乃まことかれ　千那

月鉾や児の額の薄粧　曽良

夕ぐれや兀並びたる雲のみね　去来

もし知て湖に入く

雲の峰今のは比叡に似たるかな　大坂 之道

蓮

穐風や蓮をちらして花一ツ　不知 読人

此句東武よりきこえまうす素堂か

かれらりとしぬけ抑る薹や秋の風　杉風

芭蕉葉は何になれとや秋の風　路通

人に似て猿も手を組秋の風　珍碩

加賀の全昌寺に宿りて

終宵秋風きくや裏の山　曽良

芦の穂や蕗の葉を蝶の風　江戸 山川

あさ露や鬱金畠の秋の風　凡兆

たち川露や猿の腰の紅葉のあり　去来

大比叡やたてゝ舞楽の容(?)　野童

こゝろみにかれたや桐の葉　凡兆

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ　仝

七夕やあまりいそがばころぶべし　伊賀 杜若

こゝろにも絶ましと思ふ相撲取　去来

相うたれ鶏眠るれ　伊賀 風麦

萩や〜の夢〜　及肩

笑ふて涙も小家の木槿かな　尚白

手をかけて折らで過行木槿哉　杉風

こゑ程の鐘ひるハ稲つきかな　千那

ちりぬれて漆のあかき色や姨嶽雨り　史邦

そよ〳〵や藪の内より初あらし　旦藁

秋風やとてもすゝきはうごくはず　三川 子尹

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八瀬おはらに遊吟して柴うりの文
かける序に

まねき〳〵枴の先の薄かな　凡兆

つくしよりかへりけるにひみといふ
山にて卯七に別て

君がてもまじる成べし花薄　去来

草刈よそれが思ひか萩の露　平田 李由

元禄二年翁に倶せられてみちのく
より三越路にかゝり行脚しけるに
かゞの国にて心ちわづらひていせまで先
達侍るとて

いづくにかたふれ臥とも萩の原　曽良

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆

初雁に行燈とるなまくらもと　岐阜 落梧

病雁の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　仝

加賀への小松と云所多田乃神社の
宝物として実盛か菊から草乃
かふと同しく錦の切あり遠き事
なからまのあたり憐におぼえて

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉

菊畠や二葉に九中の出九客　尚白

ちる柳や鍛に来て鳴蟋蟀よ　風麦

いせにまうでける時

菊月や矢橋に渡る人さらん　亡人　千子

三ケ月に蓋のあく田ぞさくかり　之道

霜村稗と月出るばかりぬるゝ月よ　半残

月見せん伏見の城乃捨郭　去来

菊を蒔舎に寄して

おりしろう松笠りんに露霜秋　伊賀　土芳

加茂に詣

きくよ涙のかゝる御神と
かの上人のたよりし乃
やしろの神鈴にこそつゝしも

月影や拍手もるゝ膝の上　史邦

友達の六条にかくれしてくるまよりひとつふ

新わらのしたがふさしん送る新酒哉　伊賀　卓袋

まぜもを花ふや弁之く行月の影　乙刕

京筑紫去年乃月とふ僧中ある　丈艸

川風のあとなや寒き月ひがし川　凡兆

めりくれてこよひに高りぬ月の雨　尚白

向の能き宿も月みる契かな　曽良

元禄二年つるかの湊に月をみて
気比の明神に詣遊行上人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上　芭蕉

仲秋の望猶子を送葬して

かゝる夜の月も見にけり野辺送　去来

晴月や雲を幸ひ萩の葉の末　摂津 昌房

月みんと出て人の旅するかはりし　羽紅

俤正のいかなる小屋も月さし入れ　尚白

初潮や鳴門の浪の飛御舟　凡兆

一戸や衣もやふれてこむかへ人　去来

稗の穂れ馬逃したる気色かれ　越人

渋糟やからしも捨ず荒畠　正秀

あやまりてぎゞうにあゆる鶏かな　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆

むつかしや稲の葉そよぐ田の稲葉　史邦

稼枕床のつき合ふ軒の下　江戸 千里

稲かるや渋柿原の茶家畠　珍碩

上行と下くる雲や穐の天　凡兆

鷄頭(ケイコウ)鶺鴒も見えずなりし鶏つり　半残

ひえの向のうね毎むかふ菜の畑　尚白

菊を切る跡まばらにもなかりけり　其角

高土手に鶸(ヒワ)の鳴日や雲ちぎれ　珍碩

こぼれ乃おりわたしけり稲の秋　土芳

稲かつく母に出むかふうなひかな　凡兆

自題落柿舎

柿ぬしや梢はちかきあらし山　去来

さし泥やゆふつく鴫の下ごゑ　加賀小松 塵生

肌さむし竹切山のうす紅葉　凡兆

神田祭

されハこそあれの拍子ハ先ぶれ

神田祭の鼓うつ音　蚊足

拍子さへあつしまつりや

花すゝき大名衆をまつり哉　嵐雪

行秋の四五日弱るすゝき哉　丈艸

立出る秋の夕や風ほろし　凡兆

世の中は鶺鴒の尾のひまもなし　仝

嫁負人の菊子をとめし姉の客　荷兮

春

梅咲て人の怒乃悔もなし　露沾

上﨟の山荘にまかりくるに候しありて

梅か香や山路猟入犬のまね　去来

むめか香や分入里は牛の角　加賀 句空

庭興

梅の香や砂利しき流す谷の奥　土芳

まつ嬉や胃だかき芽して梅の花　半残

梅さくや酒しのかよひのあたらしき　梧下 蟬吼

むめがゝや此一升助をも菊のかへり　其角

子良館の後に梅ありといへば

御子良子の一もとゆかし梅の花　芭蕉

痩藪や作りたらぬの軒の梅　千那

灰捨て白梅うるむ垣ね哉　凡兆

日當りの梅咲ころや屋ね半房　播石 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅になり込ひゞきかな　風麦

或はをかしく旅亭の殘夢

寢ぐるしき窓の細目や闇の梅　乙州

去来のぬし浴生のをしへをうけて

ふく日入て梅のかをはひまはるありけり

旧友嵐窓より文おこせしの文に句ありしが

業閑無とは我を見まくほしきよし

申されし初めて梅をも折つかれて感動

身に餘りて涙を押へたればかなしき

その梅の香に和してまぶたて收る

忘れぬを亡人いまも風雅を

慕さるゝ也

夢さめて又一句有り梅　嵐竹

百八のかねて迷ひや闇の梅　其角

ひとりしら梅も縁にやしらん細子日　去来

野白鳥や隱遁のけふ摘い菊菜　史邦

まつ市や雪に濟まる菊菜船　嵐蘭

八月九月両月ほとりのさゝゆく　如行

憶翁之客中

樣あしく霧をつゝまん草枕　荊雪

つゝすてゝ濁月かさゝる二葉哉　路通

七種や跡にうかるゝ朝からす　其角

我事と鯲のにけし根芹哉　丈艸

うすらひやわつかに咲る芹の花　[illegible]

継とハ重のくつさに月夜哉　仝

鶯のなかぬようてあれハ鶯哉　去来

鶯や一声ふるえうつ木　伊賀　一桐

鶯の身を逆にはつね哉　江戸　渓石

うくひすや柴ふかくれきまよへし　其角

鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆

鶯や窓に灸をすへなから　伊賀　魚日

やぶの宮柳えたのふらつくと哉　探丸

此猫をさゝるれ結て柳かれ　江戸　卜宅

垣こしにとらへてはなす柳哉　同　遠水

よこた川植わたしたる柳かれ　尚白

青柳のしたれや鯉の住所　伊賀　一嗅

あけ汁や蛤いきる場のすゝ　一村　木白

侍中の正月もよそにくらす月　楊水

思ふ所あつて

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　芭蕉

うらやましおもひ切時猫の恋　越人

うき友にかまれて猫の空ながめ　去来

露沾公にて餘寒の當座

春風にぬぎもさだめぬ羽織哉　亀翁

砂ぐさ吹れちりし月なき二月哉　尚白

出かはりや　櫃をかゝへてさはぎけり　亀翁

出替りや　幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

貴家のかしこかりしおはしまし給ひ　丸兆

白魚や海苔は下部のかい合せ　真角

人のあふさまもくりや櫻海苔　尾張 松峯

まゝ事のたきだしするやつくづくし　元志

蒲公や　花つきぬるゝ堤上　荷兮

かげろふや草に入りぬる葉の中に　百歳

かげろふやほろほろ落る岸の砂　土芳

いとゆふのいとあそぶ也虚木立　伊賀 氷固

野ゝるまゝ子をあそばせん凧　丸兆

かげろふや柴胡の原の薄曇　芭蕉

いとゆふに貝ゆるしのせ網の袂　伊賀 配力

猫脊の座中にしきやつむかな　嵐雪

彼岸まへさむさも一夜二夜哉　路通

このもしや常住かうて涅槃像　北水

藪並ぬ裏から燕わかれ道　丸兆

立さらく冬や紀のこしもの庵　伊賀 沢雉

春の夜や恋の山草ならぬ　嵐虎

ころもかへ

まつ見たや山へのり出る雲さへ門　探志
不性さやかき起されし春の雨　芭蕉
春雨や田蓑の島の鯲売　史邦
ありさふんのおくにや都ふるき書　羽紅
泥亀や苗代水の畦づたひ　史邦
蟹とかける末辨の竹や出の葉　昌房
振舞や下座になをる去年の雛　去来
春風にこかすな雛の駕の衆　伊賀 荻子
桃柳くばりありくやをんなの子　羽紅
こゝの子の塚まねかぬきじの声　三川 烏巣
里人の渡り候か橋の春　嵐雉
蜂の巣つく一夜さまよふ道連のこゝろ　半残
昨帯切く白根が嶽をとり巻く雲　加賀山中 桃妖
いつのほどこゝろもすみて山の像　伊賀 園風
日の影やごもくの上の親すゞめ　珍碩
若鵜かむ春のすゝむや柳の生　土芳
陽炎や柴胡の糸の薄曇　芭蕉
越より飛騨へ行とて籠のわたり
のあやうきところ〴〵道もなき
山路にさまよひて
鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆
うすまよりこえたる雲のうら穴　伊賀 石口
子や待ん餘り雲雀の高あがり　杉風
ひばりなく中の拍子や雉子の声　芭蕉

芭蕉菴のふるきを訪

菫草小鍋洗しあとや是　曲水

春風や節旅しを見たく欲さ哉　江戸 山店

畫讃

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

白むれ比露にまとひつく桂かれ　車来

かくらくやもみひらちある花
髭けつりんも撫出つしとけ花　ささとえて

笄もくしも昔やちり椿　羽紅

墻斗寺うつてきるつまさ哉　伊賀 望翠

うぐひすの笠落したる椿哉　芭蕉

うつゝきて迷ふふところの　利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　其角

一桜をしぬもまつし山ざくら　尚白

鷲のとあふもきこゆるやま桜　凡兆

まつさきは見えし枝ぶりのちる桜　丈草

日の角のうつくしき咲て逢さくら　史邦

著ぬよそられてなかの花の雪　千那

葛城の麓を過る

猶見たし花に明行神の顔　芭蕉

以上の国花語の春を手のうちに南にの八年様此料に賦らせたまひて伝へ

よしあしも

一里ちらされ花ちるの子孫哉　日

元文の墓東武谷中におゐては三基
其外は六年の法会の跡を知る者なし
墓の外には桜植添侍るよしなれば
散れ折られつくしてもその桜ぞ姿
依りては他の墓ほとりに咲てこれ伝へ

まつりしや花咲く塵の往還り　風阜

志ん人にありし花見かな　三秉

ある僧の添ひし墓の花にあれ　九兆

浪人のやうやく

花見ばなれをちるか　花眼　半残

朧にもされ家中の世界へか　長眉

ちる花の奥ぞいやましさぞ深く思して

大宮やよし野の奥の花乃果　芳台

花満や花の香その代を嵐かな　嵩叢

道灌山の作る

源氏の絵をうつして

桜千本ちらる嵐の花すかるさ　羽紅

庚午の歳家を焼て

焼まなりけるまで花ハちりかけにし　加賀　北枝

されちるや伽藍の檻関かしら　九兆

海棠乃されちるを満さりて散の朝　江戸　普松

大和折卿乃さ

草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉
山鳥や躑躅よけ行尾の長さ　探丸
やまつゝじ海に見よとや夕日影　智月
兎角して卯花つぼむ弥生哉　山川
鶯のあるきそめてより山路哉　伊賀 式之

木曽塚

其春の石ともならず木曽の馬　乙州
春の夜はたれか初瀬の堂籠　曽良

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける　芭蕉

鳶の羽も刷ぬはつしぐれ　去来
一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをおどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉
人にもくれず名物の梨　来
かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　邦
はきごゝろよきめりやすの足袋　兆
何事も無言の内はしづかなり　来
里見え初て午の貝ふく　蕉
ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆
芙蓉のはなのはらはらとちる　邦
吸物は先出来されしすいぜんじ　蕉

三里あまりの道かゝえける　来
この春も盧同が男居なりにて　邦
さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直りし今朝の腹だち　来
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げにさむき嶋の北風　邦
火ともしに暮れば登る峰の寺　来
ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉

いまや別の刀さし出す　来
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　来
湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆
押合て寝ては又立つかりまくら　蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　来
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷の古葉に木芽もえたつ　邦

去来九　芭蕉九　凡兆九　史邦九

市中は物のにほひや夏の月　凡兆
あつしあつしと門々の声　芭蕉
二番草取りも果さず穂に出て　去来
灰うちたたくうるめ一枚　兆
此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
ただとひやうしに長き脇指　来
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりは花のつぼむ時　来
能登の七尾の冬は住うき　兆
魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　来
立かかり屏風を倒す女子共　兆
湯殿は竹の簀子侘しき　蕉
茴香の実を吹落す夕嵐　来
僧ややさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を経る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　来
名
五六本生木つけたる潴(ミヅタマリ)　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてて早き御馬の刀持　来
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆

戸障子もむしろかこひの売屋敷　蕉
てんしやうまもりいつか色つく　来
こそこそと草鞋を作る月夜さし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのまゝにころひ落たる升落　来
ゆかみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やふり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　来
ゥさまさまに品かはりたる恋をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故そ粥すゝるにも涙くみ　来
御留守となれは広き板敷　兆

手のひらに虱這はする花のかけ　蕉
かすみうこかぬ昼のねむたさ　来

凡兆十二　芭蕉十二　去来十二

灰汁桶の雫やみけりきり〳〵す　凡兆
あふらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新畳敷ならしたる月かけに　野水
ならへて嬉し十のさかつき　去来
千代経へき物を様々子日して　蕉
鶯の音にたひら雪降る　兆
ゥ乗出して肱に余る春の駒　来
摩耶か高根に雲のかゝれる　水

ゆふめしにかますご喰へば風薫　兆
蛭の口處をかきて気味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　来
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　来
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曽の酢茎に春もくれつゝ　兆
名
かへるやら山蔭伝ふ四十から　水
柴さす家のむねをからぐる　来
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しをく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　来
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　来
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂の社は能き社なり　蕉
物うりの尻声高く名乗すて　来
雨のやどりの無常迅速　水

宜禰かふる三隣のみれた鈴さよ　蕉
しからく水に蘭のうつくらん　兆
糸桜腹いつはいに咲にけり　来
春は三月曙のそら　水

凡兆九　芭蕉九　野水九
去来九

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土持比なれや　珍碩
しとぎ祝ふて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　州
二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稲の葉延の力なきかぜ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
内蔵頭かと呼声はたれ　州
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　水
すゝきゝる杉の末川のあたり　男
萩の札すゝきの札によみなして　州
雀かたよる百舌鳥の一声　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　州

鑓の柄に立すがりたる花の雲　去来
灰まきちらしたるからし菜の跡　兆
名　春の日に仕舞てかへる経机　正秀
店屋物くふ供の手がはり　来
汗ぬぐふ端のしるしの紺の糸　半残
まくられせりしき雛乃下　土芳
大胆におもひくづれぬ恋をして　残
身はぬれ紙のとり所なき　芳
小刀乃蛤刃なる細工ばこ　残
棚に火ともす大年の夜　園風
こゝもとはおかり小役も次ぎて留　猿雖
町内の手合せ若るかくこゝぬ　残
此夜もうかれめどもの破扇　風
節句油絞らせてしまひ見ゆる　雖
少　暁寺の讃はちらちらと縁つたひ　芳
添へハ又ふ仰しこくめん帯　凡
形見さへ終を世みる会津塗　嵐蘭
うすき雪かゝる竹の刻み結　史邦
花に又ことしのつれも定らぬ　野水
雛の袂を染るはるかぜ　羽紅

芭蕉三　乙州五　土芳三
孫頎三　園風三　素男三
猿雖二　智月一　嵐蘭一
凡兆二　史邦一　去来二

卅水 一　正秀 一
半残 四　洒紅 一

幻住庵記

芭蕉

石山の奥岩間のうしろに山有国分山と云そのかみ
国分寺の名を伝ふなるべし麓に細き流を渡
りて翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮
たゝせたまふ神体は弥陀の尊像とかや唯一の家には甚
忌なる事を両部光を和げ利益の塵を同じう
したまふも又貴し日比は人の詣ざりければいとゞ
神さび物しづかなる傍に住捨し草の戸有よもぎ
根笹軒をかこみ屋ねもり壁落て狐狸ふしど
を得たり幻住庵と云あるじの僧何がしは勇士菅沼
氏曲水子の伯父になん侍りしを今は八年計昔に
成て正に幻住老人の名をのみ残せり予又市中
をさる事十年計にして五十年やゝちかき身は
蓑虫の蓑を失ひ蝸牛の家を離れて奥羽
象潟の暑き日に面をこがし高すなごあゆみ
くるしき北海の荒礒にきびすを破りて今歳
湖水の波に漂ふ鳰の浮巣の流とゞまるべき芦の
一本の陰たのもしく軒端茨あらため垣ね
結添などして卯月の初いとかりそめに入し山の
やがて出じとさへ思ひそみぬさすがに春の名残も
遠からずつゝじ咲残り山藤松に懸て時鳥しばし

ゐる程宿りし家の後さしかたを求つゝつく
らかつしくしたとそうるよ具して魂足の柱を立て南
まちし自身ハ蕭洒旧庵よ立ツ山を東南ふみそく
さらに人家よさかしれ海を南にして東の峯よりわたし
水見海を浸して涼し月は後乃山比もれのゐる松より
宝松の去をあこめて樵の樵を語うしゐきを
光てらりよかりふ本樵の声梵鐘の小田に早苗とる
春学寮ふ多雲乃こゑふ飛鶴乃松音ゑ声
枕して南に行よ雲晴し中ゆきをる士峯
乃待ふかくよひく武蔵野て古き 栖見枕にとひそてられ田
出ふよ古人をうそふさこれを歟よふよ字下待樵
に山なる眉庫の里くらし宛くつてうちつ網代に

まそしらみ乃家の家ふ集まり渡るありけりかはれ眺ら六月生
ありし寄りし後の窓ふ庭の作り松乃棚作り葉
乃用の性をせ蔵く樣の梗掛しゝ名月彼海棠ふり
墓をいとなむ主庵の峯ふ菴を結へる玉扇徐隹
る徒よハおもしれ唯聽壁山氏と成し扆敲よ見え
をみけ水し空山をし風を打て身そさよし心まゝ
あり脩そ谷もあ清水を汲く月の歌くとく〳〵の雪を
俄く一炉の傍のとうへしそそさ昔往見人乃孫ふ
わさるく偖ありし待りて気そゑ亜るる拙すきもあし
精俤一間を隔く夜の丸ありさむへきこゆるありといさん
去つしへりさ間を白飛集ゐるれふの僻症を加義の
甲斐何し寂子ふて付られ猶ふの僻りいさをたのゆる

とある人をして額を乞いとやすくと筆を染て
幻住菴の三字を送らる頓て草菴の記念となしぬ
すべて山居といひ旅寝といひさる器たくはふべくも
なし木曾の檜笠越の菅蓑計枕の上の柱に
懸たり昼は稀々とぶらふ人々に心を動しあるは
宮守の翁里のおのこ共入来りていのしゝの稲くひ
あらし兎の豆畑にかよふなど我聞しらぬ農談
日既に山の端にかゝれば夜座静に月を待ては
影を伴ひ燈を取ては罔両に是非をこらすかく
いへばとてひたぶるに閑寂を好み山野に跡をかく
さむとにはあらずやゝ病身人に倦て世をいとひし
人に似たり倩年月の移こし拙き身の科を

おもふにある時は仕官懸命の地をうらやみて
一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしにたどり
なき風雲に身をせめ花鳥に情を労して暫く
生涯のはかり事とさへなれば終に無能無才に
して此一筋につながる楽天は五臓の神をやぶり
老杜は痩たり賢愚文質のひとしからざるも
いづれか幻の栖ならずやとおもひ捨てふしぬ

先たのむ椎の木も有夏木立

題芭蕉翁国分山幻住菴記之後

何世無隠士以心隠為賢也何處無山
川風景因人義也間讀芭蕉翁幻住菴

記乃識其賢且知山川得其人而益美
矣可謂人与山川共相得焉延作鄙章
一篇歌之曰

邑湘南兮國分嶺　古松欝兮緑陰清
茅屋竹椽纔数間　内有佳人獨養生
濫口錦繍輝山川　風景依稀入詠塲
此地自古富勝覧　今日因君尚益栄

元禄庚午仲秋日　霞軒具州

几右日記

閑雀春中見て出る蘂かな　曲水
こ川さえ乃経あり加川の山　珊水

鶏もうろく聞々秋鶏かな　去来
浦山に五しも雨をしてゝく　丸兆
軒ちかき岩根桐々秋積の陰　千那
細脛乃中とぬ采や夜のやま　孫頓

猿蓑帖

柿りふる紙帳よりけと送りかり　珊徒
川さきて蕗の葉ふ見る桐かな　里東
営能るを於よもてけ乃霧　乙咫
藺の蒲乃中の花を一つき　怒誰
舟もし中葉ふ経そくあり箸　探志
五明六羽菴きりまりも人こそ　充志
来つさまふ川まして角子秋鶏哉　泥十

星あかり根すゞしや風見かな　史邦

有徳や海を晨日に夕すゞみ　正秀

声つきさ八雲に蓑に声つむ清水かな　六之 柳浪

涼しさや星見て茶のむ暁の空　如行

語よりあかるかり

雅乃本をとりて帰や蝉の声　羅城 朴水

月の下や手洗ふ独る湯涼し　ミノ垂井 市瀧

交みあらん

孫右衛門や早苗とりけふ夕涼　半残

麦の穂をおさへて

一つ家これや多田のことく麦　之道

甚夕音

一夏のる山さかりや旅のささ　大津 曽町

夕立や椅木の奥の一きさり　及肩

昇猿猴摶

秋風や田よりもれくるよ利　尚白

除山暮

出るや霧しきさあらくこのし川芝に　小枝

木履めく傍の生たる蓼の声　木節

色紙をまる書

縫まらん葉衣や萩の露　羅府 扇

稲の花これを佛の土産かな　智月

石山や行かて果せし秋の風　羽紅

桶の輪やきれて帰るおとさかな　昌房

里人の蔵夕めし用乃なつさけ　何処
帰やらてよし塩ふりくりのくきるまで　越人
越人にも向しく語合ふく
蓮の実の供に飛入庵かれ　等哉
明年語るる我庵
蒸やわらしも果んとの出る　嵐蘭
同夏
涼しさや此菴をさへ住捨し　曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首領也非比彼山寺
偷衣朝市頂冠笑呂任心盛物写魚而已矣六

洛下逸人凡兆去来随翁遊学棋鈹竹窓蝶雪
凌節斯有家属撰此集玩弄無色自謂絶
超孤腹白裘青也於是四方唫友憧々往来或
千里寄書々中皆有佳句日蘊月隆各稱文
章我有昆仲驕于不集緑者索居寓栖為難
逢信且有麁倪婦人不嫁摩者廉言細語為書同
志雖無至甚域何棄其人乎哉日本今四序作六巻
故不遑広捜他家文林也雖取元禄四稔辛未
仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶今兆来吟席見
需把跋支鬢昏日尻卒援毫不揣拙疵幾一廿栽高
張有補于詞海漁人云

凡狂世衲
丈草漢書

正竹書之

天富藏書